
名無しからの手紙

白竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無しからの手紙

【Nコード】

N5189BA

【作者名】

白竜

【あらすじ】

僕は普通に生活している中学生。

しかし急に僕の家送到られてきた名無しと言う名の人から送られてきた手紙。そこには意味の分からない事が書いてあった！！

僕は友達にも送られてきてるらしいので友達と名無しとはだれか手紙の意味とはなんなのかを説明していくのです>><

名無しからの手紙（前書き）

皆さん、この小説は僕が始めて書いた小説です。

少し下手で語彙も少ないかもしれませんが一度読んでみてください

！！

この物語は探偵が好きな人やファンタジーが好きな人におすすめします。

では、あなたを不思議な世界へとお連れいたします。

名無しからの手紙

僕はいつも通り朝7時に起床した。

やっぱり朝は「気持ちいいな」

と感じながらポストを覗きにいくと僕宛に一通の手紙が来ていた。

誰からだろうと見てみると名無しとだけ封筒の後ろに書いてあった。

僕は名無しって誰？と思いつつながらその封筒を開けてみて中の手紙を取り出した。

そこには一枚の便箋が入っていた。その便箋を見てみると真ん中に一文文字が書かれていた

「この世の中の人々には与えられた使命がある」

この一文だけが書いてある便箋。

初めはあて先を間違えたのかな？と思い普通に気にせず机の上においていた

僕はこの時までこの一文から始まる思いもよらぬ出来事を想像しなかった

僕は今、中学2年生の中学生だ！皆からは「白竜」と呼ばれてる。

なぜかは知らないけど中2の初め頃からこういう風に呼ばれるようになった

明日は結城という友達の誕生日、僕は隼人という友達と今日誕生日プレゼントを買いに行く予定なのだ

後一分ぐらいで隼人が来るだろう。そう思っていると『ピンポン』とインターホンの音が鳴り響く

隼人が来たのであろう。そう思っ出て出るとやはり隼人が待っていた！

「少し待っていてくれ、用意がまだ整ってないんだ！」

と僕は大急ぎで用意をしてきた。
何を持っていくか迷ったけどお金と時計は必ずいつももっていくようにしている

そして自転車でデパートに向かっている途中の事だ、隼人が急に意味の分からない話をしてきた。

「あのさ〜白竜、俺の家に不思議な手紙が来たんだが聞いてくれるか？」

「おう、どんな話だ？」

「今日の朝8時ぐらいにポストを見ると名無しと言う名の人物から手紙が届いていたんだ」

それを聞いた瞬間僕は啞然とした。それは今日僕の家にも届いていたらだ

それでその僕の家にも届いていた事を隼人に言うと隼人は急に閃いた様に

「もしかしたら結城の仕業じゃないのか」

と言い出した。僕もそのときはそう思っただけで納得していた。

そんな話をしていたらもうデパートについてしまった

僕は隼人に結城は何がほしがるとか聞いてみた

そしたら隼人は自慢げに「俺は買う物を決めている」と鼻高々に言い出した

僕はそう言っている隼人の後ろをついていくと隼人はゲーム売り場に向かっていた

僕は何をかうのが気になり隼人に聞いてみた。そしたら隼人は

「俺は今ハマっている幻覚操作ゲームを買ってあげようと思うんだ」と言った。隼人はそんな3000円位するものを買うのかと思ひ僕も勇気を振り絞り2400円のエアージェンを誕生日プレゼントにしようと思ひ買った。初めは500円くらいにするつもりだったけど

「まあいいか」と思ってしまった。僕はその軽い気持ちに負けてしまったのだ。

後々考えるとこれで今月のお菓子はもう買えないなと後悔した。そしてデパートから隼人と帰ってる最中にちょうど部活帰りの雄大と明に出会った。

二人は疲れていたらしく「バイバイ」としか言葉を交わさなかった。そして隼人とも別れを告げ僕は家に帰った。

玄関には靴が一足もないお母さんは買い物かなと思ひ適当に冷蔵庫の中にあつた竹輪を食べた

そして自分の部屋に戻りあの手紙をもう一回読み直してみた。

僕は意味を深々と考えたがやはり結城のいたずらろつと思ひその手紙を机の上においた。

一階で「ただいまー」とお母さんの声があった。今は午後4時だ。

お母さんが買い物から帰ってきたのであろう、僕は「おかえり」とだけ声をかけて

明日の学校の準備を済ませた。

そこにしつかり結城に渡すプレゼントも入れておいた

これで学校の用意はばっちりだ。

学校の用意を済ませた僕は一階に降りてお母さんに手紙のことを話した。

そしたらお母さんは笑いながらいたずらじゃないの？と言ってきた僕は「やはりそうなのか」と思ひ明日までその手紙の事に触れようともしなかった

そして僕は二階に上がり急に疲れが襲ってきたので睡眠をとった
僕は急に「はっ」と目が覚めた。今は何時だ？

僕はベッドの上においてある目覚まし時計で時刻を確認した
そしたら夜の8時だ、僕が寝てから結構時間がたったのであろう
一階に降りたらお母さんが晩御飯の片付けをしていた

僕のご飯はテーブルにおいてある

僕はお母さんに質問した。

「これを僕が食べていいの？」

と僕は言った。そしたら

「うんそれを食べていいよ」

とお母さんが言った・・・

僕は夜ご飯をゆっくり食べてテレビを見ていた

それで夜ご飯を食べ終わりお風呂やすべての事が終わり寝ようとした
もう11時を超えている。今日はもう寝ようかと思いい電気を消し布
団に入った。

二日目の朝、今日はいつも通りの学校だ。

僕は急いで朝ごはんを食べてポストをチェックした。

また広告と一緒に封筒が入っていた今日も名無しからだ

僕は「結城はなにがしたいんだ？」と思いいその封筒を開けた
そしたらそこにはまた手紙が入っていて手紙の真ん中に一文

「今日は僕《名無し》が使命を果たすべき時だ。」

また意味の分からない事が書いてある。

これで二枚目だ、今日はこの手紙の事を結城に聞いてみようと思いで学校に行った。

まだ僕の教室には人が二人しか来ていない結城と隼人は僕と同じクラスなので一時たつたら来るであろう

僕が学校についてから5分が経過したころであろう。隼人が青ざめた顔で教室に入ってきた

僕は明らかにいつもの隼人と様子が違うので隼人に声をかけてみた

「隼人、どうした気分でも悪いんじゃないのか？」

そしたら隼人はかばんの中から一枚の手紙を差し出してきた

僕はその手紙を見てみた。そしたらそこには思いもよらぬ事が書いていた

「僕は今日皆が成し遂げなかった事を実行に移すんだ。」

「それは神山中学校の2年生を全員僕の支配下にする事なんだ」

僕はこれを見て思った。これは確かに名無しからの手紙だがいつもと違い二文書いてあった

僕は隼人に「こんなのでたために決まってるじゃないか」と慰めてみた

そしたら隼人も気持ちを少し落ち着かせたらしく神山中学校のことをいきなり話し出した

「俺は今日の朝この手紙を見てから神山中学校のことを調べてみたんだが神山中学校は

俺たちの学校の隣の校区にある学校らしいもしこの言ってる事が本当なら約180人を動かすってことだぞ
そんなことが一人で出来るのか？」

と隼人が熱心そうに言ってきた。

僕はそこでようやく気づいた。これを書いたのは結城じゃないってことに……

隼人はもうとっくに気づいているのである。

そこにちょうど良く結城が登校してきた。僕達は結城にこの手紙のことを話した。そしたら結城の家にも

僕らと同じ手紙が来ていたらしい。結城はそういうのを気にしないやつだから

ゴミ箱に捨てたって言うけど、これは後々重大な事になっていくと僕はそう思った。

そしてチャイムがなり先生が教室に入ってきた。

「起立、礼、おはようございます。着席」

日直の声と共に皆が挨拶をした。

先生の話が終わり8時45分だ。一時間目は国語だったので静かな授業だった。

ついに10時半を含む二時間目の始まりだ。

二時間目は体育だった、近くの公園を走るという一番好きなことだ僕は公園の時計を気にしながら隼人と結城と同じペースで走った。

あと1分で10時半になるであろうところに100羽近いからすが急に飛んできた

初めは驚いて声が出なかったけどすぐに気がついた、

10時半に神山中学校のほうからからすが飛んできたという事は神山中学校で何かあったのかもしれない

僕は隼人にそのことを言おうとして隼人を見た。そしたら隼人も僕と同じことを思っていたらしく

結城も多分同じことを思っていたと思う。

でも体育の授業を放棄する事も出来なくてもややもやとした気持ちで体育を終えた。

二時間目が終わり皆が教室で着替えてるときに急に先生が入ってきた。

「皆いったん席についてくれ。」

と先生が叫んだ。

僕は「どうしたんだろう」と思いながら席についた、クラスのみんなもおかしそうな顔で席についた

先生が会話を少しずつはじめていった。

「今日の10時半ごろ突然神山中学校のほうから烏が飛んできたんだがそのことについて話したいと思う

神山中学校のほうから連絡があつたんだが神山中学校の二年生とその時授業をしていた担任の姿が消えたらしい。まだはっきりとしたことは分からないがこれは誘拐事件かもしれない隣の校区で起こったことだから今から集団下校になった、急いで荷物をまとめて体育館に集合だ」

と先生がそのことを告げて教室から出て行った。

そしたら雄大と明がめっちゃうれしそうな感じで「二時間目で終わるとか馬路でラッキーじゃん」

って言った。まあクラスのほとんどがそのことで喜んでる、でも僕と隼人と結城は違った。

今から一体何が起こるのかで恐怖に怯えていた。そしてすぐに僕達は体育館に向かった

校長先生の話が終わって集団下校をするグループに別れ隼人と僕の家は遠いので集団下校でも違う

グループになった。隼人が言った。

「後でメールするから見てくれよ」

僕は大きくうなずいた。そして僕も別のグループで下校した僕が家に着いたときには隼人からのメールが来ていた。

その内容は「今帰ったぜ。白竜はまだ帰ってないのか？帰ったらすぐにテレビをつけてくれ、大変な事になってるぞ」

このメールを見て言われたままにテレビをつけた。

バラエティ番組や普通にニュースがやっているだけだった僕がテレビを消そうとした瞬間に

ニュースで神山中学校のニュースが流れた。

もうそんなところまで情報が届いているのかと思いつつもそのニュースを見ていた。

でもそのニュースでも「誘拐じゃないんでしょうか」としか言わなかった。

僕は「誘拐じゃないと思ってるのにな」と口に出してしまった。

僕はお母さんが作ってくれたお弁当を家で食べてすぐに隼人の家に行った。

隼人と結城と遊ぶ約束をしていたのだ。誕生日プレゼントはそこで渡す事になってしまった

結城はまだ来ていなかった。僕は隼人の家にとらせてもらい二階で隼人と話をしていた

そこにインターホンが鳴り響いた。結城が来たのである

隼人は少し待っていてくれといいドアを開けに行ったそして結城が来た。

僕は隼人と同時に声を合わせて隼人の部屋に入ってきた結城に言った

「誕生日おめでとー　これが誕生日プレゼントだよ」

結城は初め戸惑いを隠せなかったのだがめっちゃうれしそうに「あ

りがとう」って言ってくれた

僕達はそういう結城を見てともうれしかった。結城はいろいろ俺達が上げた物で遊んでくれてそれを見ている僕らも楽しかった。そしていろいろ遊び終わって疲れた後、俺達が集まって本題に入った。今日起こったあの出来事は人間の仕業じゃないと結城が言った。

俺達はそれを完全否定しようとして論を言い通そうとしたのだが結城の論に負けて論破されてしまった。

俺達はみんなでその手紙の犯人を突き止めようといういろいろ案を考えた。

僕は「ポストの前に監視カメラを仕掛けるのはどう?」という案を出した

みんなは僕の意見に賛成してくれた。

僕はそのことを詳しくみんなに説明した。

「まず、ポストの横にこっそりカメラでも携帯でもいいから録画できるものを仕込んでおく。

そしたら誰がいつポストに手紙を入れに来るか分かる」

僕は詳しく説明し終わった後それを実行に移すため皆解散した。

僕は早速家に帰りリビングの棚においてあるデジタルカメラを取り出した。

そして自分の机の引き出しにそれを隠しておき夜になったら仕掛けに行こうと思った

僕がもう一回手紙を読み直してみた。そしたらお母さんが仕事から帰ってきた。

すぐに夕飯の支度を始めるといい台所に向かっていった

今思うともう夜の7時だ、僕はいつの間にか昼寝をしてしまっていたらしい。

僕は机の引き出しに隠していたカメラを持ち出し外の空気を吸ってくるといふ嘘をつき外に出た。あとはポスト横に茂みにカメラを設置するだけだと思い一応確認もした上で仕掛けておいた。そして家に戻り夕飯を食べてお風呂にも入りその日はベッドの上で友達と携帯で電話をしていた。

「今日から一週間休みつて最高だよな！もう遊びほうけてやるぜ」と雄大が言った。

「そうだな。でも今不可解な事が起きてるんだ。雄大には分からないよな」

「不可解な事？俺にも起きてるんだけど・・・変な手紙が送られて来るんだ」

それを聞いた瞬間僕は驚いた！

「雄大、それは本当の話か？いつから送られてきたんだ？どういう内容が書かれているんだ？すべて詳しく説明してくれ」

僕は熱心になりすぎてたのか質問攻めだった。

雄大はいきなりすぎてびっくりしてるが冷静に教えてくれた。

「俺はいつも朝に新聞を取りにポストに行くんだけどその時に俺宛に名無しから手紙が来るんだ。

しかもその内容がなんかアニメみたいでさ。【お前は魔法を使う事が出来る】の一文だけ書いてあったんだよ意味がわからねーよな、まあその手紙はほったらかしにしてるんだけどさ」

僕は言葉を失った。俺達以外にも手紙が回っているなんて思っても見なかったからだ

「おい、白竜どうした？おーいいまいるのか？そのことがどうしたんだ」

「いやなんでもない、いろいろ聞いてすまなかったな。今日はもう寝るわお休み」

「おうそうか。なら切るぜお休み」

ブチブチブチブチブチブチ

僕の携帯からこの音だけが聞こえてくる・・・

僕はすぐに隼人と結城にこのことを教えた。

隼人と結城はびっくりしたらしくメールでもそれが伝わってくるほどだった。

それと隼人も結城もカメラを仕掛けたらしく準備が整ったようだ！

後は明日の朝にそれをチェックして犯人を突き止めるだけだな。

僕は早く朝が来てほしいと思いつぐに寝た。

犯人はついに分かかってしまうのか？あの手紙の意味は一体なんなんだ！！

次回に続く>><

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5189ba/>

名無しからの手紙

2012年1月14日12時55分発行